
幼なじみ

柴犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼なじみ

【Nコード】

N3440N

【作者名】

柴犬

【あらすじ】

緑ヶ丘小学校に通う小学六年生の斉藤一夫は一学期の始業式のクラス替えで幼稚園の頃、一緒だった女の子小川千鶴にばったり会ってしまった。会ったばかりにとんでもない事に、神社でひよんなことから一夫と千鶴の体が入れ替わった。つまり、一夫が女の子で千鶴が男の子になってしまったのだ。それぞれ違う性にびっくりする二人は。

第一話 始業式（前書き）

おす、俺は斉藤一夫だ。

実はこの物語の主人公だが、俺が「あたし」となってしまうのだ。
変な感じだろうがまあ聞いてくれ。

第一話 始業式

4月5日の始業式

春休みも終わり、緑ヶ丘小学校は新年度の一学期がスタートした。

校庭の桜も満開で花びらがひらひらと散り始めた。そんな中、斉藤一夫は新しく小学六年生に進級し、一学期の始業式終了後に新しい六年のクラス替えが発表になった。一夫は二組になり慣れ親しん五年生の教室をあとにし、ランドセルを持って今までのクラス数人で新しい二組の教室に入った。「斉藤一夫」の名札の貼った席に着くと「一夫君！ 斉藤一夫君！」

後ろから女の子が俺に声を掛けてくる。後ろを振り向くと

「やっぱ、斉藤一夫君だ！ あたし覚えてる？ ひまわり幼稚園の時、一緒に遊んだ千鶴よ 小川千鶴！」

（小川千鶴？ 幼稚園にそんな子と遊んだっけ？）
長い髪に目がクリクリしてピンクのキャラクタートレーナーにジーンズ姿の背の高い女の子が俺の後ろに立っていた。

「知らないよ！」

「知らないの？ あたし、一夫君事知ってるわ。デベソでおしりにホクロが二つあるの、パンツ脱いで見せてよ！」

「バカ！ そこで脱ぐバカいるか？」

俺がムキになると千鶴もムキになりとんでもない事を言い出した。

「じゃあ！ 覚えてる？ 一夫君が幼稚園の時、あたしん家に遊びに来た時、おもらししてあたしのパンツ穿き替えたからおちんちんが出せずにおちんちんが無くなったと泣いての覚えてる？」

千鶴が大声で喋るものだから教室中に聞こえ、爆笑の渦になった。

ゲラゲラ ゲラゲラ

俺は顔が真っ赤になり恥ずかしくなった。

「ほら、顔が赤くなってる」

ゲラゲラ ゲラゲラ

(穴があつたら入りたいよ)

「デベソでオネシヨの斉藤一夫君！」

クラスの悪ガキどもが囃し立てた。

ガラッ

「静かきなさい！　そこ席ついて！」

短い髪にジャージ姿のボーイシユな女教師、大場恵子(30歳独身)先生が教室に入り、このクラスの新しい担任の先生だ。

下校時間、俺は黒のランドセルを背負つて教室を出ようとしたら、小川千鶴が

「ねえ、一緒に帰ろうよ」

花柄の手提げバツクを持って。

「お前と何で一緒に帰るんだよ」

「いいじゃん、あたし達幼なじみだもん」

「何が幼なじみなんだよ、お前のおかげで今日恥かいたんだぞ、だいたい小学六年生が男女一緒に仲良く帰ったら変に思われるじゃんか」

「あつ！　帰りにあたしん家に遊び来ない？　あたしん家幼稚園の

頃から変わらないわ」

下駄箱で靴を履き替え

「じゃあな　バイバイ!!」

俺はその場から走つて帰った。

「あーん！　待つてよ!!」

千鶴も俺を追うように走つて来た。

ハアア　ハアア　ハアア

俺は千鶴を振り切ろうと必死に走った。

いつしか、小高い丘の神社に来てしまったのだ。神社の境内で一息した。

ふと見ると神社の石段の所に長い髪にピンクのトレーナーを着たジーンズ姿の女の子が立っているではないか。まさしく小川千鶴だ。

(俺に散々恥かかせやがって、よし)

千鶴の背中にそつと近づき大声で

「わあっ！！」

「きゃーあー！！」

千鶴はびっくりして石段から踏み外しそうとなった。俺は思わず

「あっ！ 危ない！」

千鶴を抱き止めたはずみで二人とも一緒に石段を転げ落ち気を失ってしまったのだ。

第二話 俺のモノがない

石段から転げ落ちた二人は気を失ったままだった。

しばらくして男の子が起き上がり女の子の顔を見て、何もなかった様に石段を上がって行った。女の子のほうはまだ気を失っていた。

「うーんうーん」

女の子つまり小川千鶴が起き上がった。髪の毛の長い頭を振りながら

（痛ててて、頭が痛いな）

石段の踊り場、鳥居の所に黒のランドセルや千鶴の花柄の手提げバッグが散乱し千鶴は黒のランドセルを背負って花柄の手提げバッグを持って、家いや一夫の団地へと帰って行った。

一夫は、まだ千鶴の体に入れ替わった事に気が付いていない。団地の敷地に入り商店街を歩いていると女の子が黒のランドセルを背負っているのに珍しいのか。人びとが千鶴になった一夫をじろじろ見ている。

（俺をじろじろ見やがる、顔に何かついてるのかな）

7棟の前に着くと階段を上がり四階の一夫の家の扉の前、「405

斉藤」の表札、父と母に一夫の三人暮らし

錆かかった鉄製の扉を開けて

「ただいま！」

何か声が高い気がする。

「ただいま！」

誰もいない

（お袋、買い物かな？）

気にも止めず、家へ上がった。急に小便がしたくなりジーンズの前を押さえ便所へ

便器の前に立ち、ジーンズのチャックを開けホースを出そうとしたら

（あれ！？ ブリーフの前の穴がない！）

ボタンを外し、ジーンズを膝まで下ろし下半身の前を見るとなんと

花柄パンツを穿いていたのだ。

(なななんで、おおおれが女モノのパンツ穿いてるんだよ、まままさか…)

花柄パンツを恐る恐るずり下げ、下ろした下半身を見たら

「おっ！ おっ！ ななない！ なくなってる!？」

男の大事なモノがなくワレメちゃんになっている。

慌てジーンズと花柄パンツを上げ便所を飛び出し、自分の部屋へ、自分の服に着替えようとピンクのキャラプリントのトレーナーを脱ごうと胸まで捲り上げたら胸に白のブラジャーがしてあった。俺はブラジャーから未熟な小さな二つのおっぱいを揉んだら

「痛てててっう！」

(俺！ 女になってるう!?)

自分の鏡をふと見たら、

「千鶴になってるじゃん！」

そう、今になって気が付いたのだ。

(まさか、千鶴も…)

俺は団地を飛び出し、自分の自転車で千鶴の家へ向かった。

第三話 俺になった千鶴

俺は何か何だかわからなくなつた。とにかく俺の体がおかしくなつたのは確かだ。あるモノがない、ないモノがある。千鶴だって同じ事である。

「コラ！ 危なえじゃないか！」

歩行者の怒鳴り声も聞こえず、千鶴の家へ一目散に自転車を飛ばした。

小川と書いてある表札の門に自転車を置いた。ここが小川千鶴の家か、幼稚園の時から変わつてなあと思つてる場合ではない。

玄関に近づくと

うわあああん うわあああん

気持ち悪い男の子の泣き声が聞こえてくる。

ガラガラ！

うわあああん うわあああん うわあああん

玄関を開けると泣き声がさらに大きくなつた。

「こんにちは！」

俺は勝手に上がり込み奥のリビングに入ると

「うわあああん 千鶴よ 千鶴！ あたし ママ ママ わからな

いの？ ううっ」

なんと俺になつた千鶴が泣きわめいていた。ただ俺は呆然とするだけだった。

（これが俺かよ！）

思わず俺は

「バカヤロウ！ 泣くじゃないみっともない！！」

千鶴になつた俺を

「あたしだわ！ あたし あたし 千鶴よ 千鶴 千鶴だわ」触りまくつた。

「気持ち悪い、触るなよ」

俺になった千鶴を突き飛ばした。

「千鶴！ 乱暴はおよしなさい！」

「あっ！ おばさんこんにちは、千鶴さんの幼なじみで今度同じクラスになった斉藤一夫といます。幼稚園の頃からおばさん変わっていないあ、それに比べたら家のお袋つたらこんなデブになっちゃて…」

バシッ！

「千鶴！ ふざけるのもいい加減しなさい！」

千鶴のお袋が俺にいきなり平手打ちをくらった。

「うつつ うわあああん」

千鶴はリビングを飛び出していった。

「千鶴！ 待てよ！」

俺も千鶴を追いかけて飛び出した

「千 千鶴！ お待ちなさい！」

千鶴ん家の門を飛び出し、二人とも歩いていた。

「グズン 一夫君、あたしどうしたらいいの？」

「俺もわかんねえよ、今は誰も信じてはもらえねえ、当分は千鶴は俺ん家で俺は千鶴ん家で暮らすしかねえ」

「あたしのお家へ帰りたいわ うわあああん」

「お前、泣くなよ。俺まで辛くなるよ」

「俺ん家まで送って行くから、後乗れよ」

千鶴が横座りしていると

「跨って乗れよ、手を俺の体に廻すんだ」

千鶴が俺の胸を掴んだ

「痛てててっう！ 手を下に廻してくれ、さっき胸を揉んだらヒリヒリして」

「まあ！ 一夫のバカバカ！ あたしの胸触ったのね？ 一夫の工

ツチ！ 痴漢！ スケベ！ 変態！…」

千鶴が俺の背中をバシバシ叩きやがる

「痛てて、叩くなよ しっかり掴まれよ」

二人が乗った自転車が走り出した。途中で自転車でパトロール中のお巡りさんに呼び止められ

「こちらから！ その中学生の女の子！ 自転車の二人乗りはいけないだろ」

背が高いから中学生に間違いられた。

「俺、小学生です」

「いや、ごめん中学生と間違えて！ 小学生の女の子が二人乗りしちゃいけないぞ！ 気を付けて帰りなさい」

二人の乗った自転車は団地の敷地内に入り7棟の前に着いた。

「ここが俺の家だ

カツン カツン カツン

四階まで階段を上り、405号室の鉄製のドアを開けると俺のお袋が仁王立ちしていた。

「一夫！ どこほつつき歩いての？ 早く上がりなさい！」

「グズン うつつ うつつ」

「どうしたの一夫？」

「違うんだ！ よく見てくれ、俺は斉藤一夫！ あいつが今度同じクラスになった小川千鶴」

「小川さんね、ふざけないでお家に帰りなさい！」

「一夫、早く入りなさい」

「うつつ うわあああん うわあああん」

「何、泣いての一夫？ おかしな子だね」

キュウウバタン！ ガチャン！

コツツン コツツン コツツン

階段を降りて7棟の前に置いてある自分の自転車を自転車置き場に直し、俺の家である千鶴の家に帰る事にした。

第四話 初めての夜

四月の初め、日が冬に比べ長くなつたといえもう辺りは日が暮れ暗くなつてきた。千鶴になつた俺は千鶴の家に行くいや帰るハメになつた。小川という表札の門をくぐり、玄関を開けるとガラガララッ「おじゃまいやただいま」

千鶴の母親が立っていた。

「千鶴！ 遅かつたじゃないの？ 今までどこ行つての？ 夕御飯の支度出来てますから食堂に来なさい！」

「はい！」

「千鶴！ 何ですかその格好は！ ジーパンのチャック開け放しで、もう女の子でしょ！」

ジーンズを見てみるとチャックが開いてて花柄パンツが開いてるチャックから覗かしている。俺は恥ずかしくなりチャックを閉めた。

「手を洗つてきなさいよ」

「はい！」

俺はダイニングに入ると夕食の支度がしてあつた。

「ねえ、ママ！ 俺のいやあたしの席どこ？」

「いや！ 忘れたの？ あなたの席はお姉ちゃんの隣でしょ！ しっかりしてちょうだい」

俺は席に着くと

「ただいま」

「千佳！ おかえり」

千佳お姉ちゃんが帰ってきた。千鶴の姉、小川千佳（緑ヶ丘中学校の二年生）が帰宅しダイニングに入ってくるなり俺はお辞儀をしたら。

「何よ、千鶴つたらお辞儀なんかしゃつて！」

セーラー服姿の姉が俺の席の後ろを通ると汗臭い女の臭いが鼻をついた。

「千鶴つたら、今日変なのよ！ 帰るなり男言葉を使うし、自分の席は忘れたり」

「千鶴は新しく六年生になったから大人ぶりたいのよ」

「そうかしら!？」

ガツガツ ガツガツ ズウィツ クチャクチャ クチャクチャ ガツガツ:

「千鶴！ もうちょっと女の子らしく食べられないのお行儀が悪い！」

「お袋！ おかわり！」

「千鶴！ あなたこれで五杯目よ」

千鶴の小さな茶碗で一夫にとって足りないくらいだ。

プルプル プルプル

「千鶴！ 電話とってちょうだい」

「もしもし」

「もしもし、あたし千鶴よ」

「なんだ！」

「あなたのところ、うまくいってる？」

「ああ、いってるよ！ そっちは？」

「うまくいってるわ」

「お前なあ、その気持ち悪いオカマ言葉やめてくれ男という事忘れないでくれ」

「わかったわ！ 思い出したけど、あたしの体変なの、あれって形かわるのね」

「あれって……」

「おしっここの出るところよ、おしっこしたあと紙で拭いたら形かわって……」

「バカッ！ 紙なんかで拭くなよ！ あんなもん振り回してしまえばいいんだ！」

「わかったわ、あなたのほうは紙使ってよ」

「わかったてば」

ガチャン

一夫の団地では

「一夫！ ご飯よ」

「はあい」

団地の狭い居間で父母と一夫が正座してテーブルを囲んでいる。父がビールを飲みながら

「一夫！ やけに行儀がいいなあ、何かあったんか？」

千鶴はうつむき下限に

「うん」

「今日！ 同じクラスで一緒になった小川千鶴という女の子のせいですよ。一夫の魂を吸い取られたじゃ？」

「ハハア！ 小川千鶴か。その子に会ってみたいのう」

「バカな事を言うんじゃないやありません。あなたも魂吸い取られますよ」

「ごちそうさま」

「一夫、もう食べないの？」

一夫のどんぶり茶碗を半分残して

「具合悪いの…」

「あたし、もう寝るわ」

「パジャマに着替えなさいね」

「おやすみなさい」

千鶴の家では、夕食が終わり

「千鶴！ ちょっと来なさい！」

「なあに？」

「おばあちゃんにご挨拶しなさい」

仏壇のある居間に連れて行かれ

「おばあちゃんに手を合わせなさい」

チーン！

「おおれ、自分の部屋で寝るの？」

「何、言ってるの？ 当たり前でしょ！」

居間を出て、玄関を通ると千鶴の父が帰宅した。お辞儀をすると父

は不思議そうな仕草をしていた。

千鶴の部屋に入ると

「うわっ！ くせえ！ 女臭い部屋」

一夫は部屋のドアを開けると思春期の女の子の臭いが鼻をついた。

部屋の中は可愛らしいベッドと白の整理タンス、鏡台に勉強机に椅子は千鶴の赤のランドセルが掛けてあった。俺はそのままベッドに大の字になると

「何ですか！ だらしが無い。パジャマに着替えなさい！ 体操服にゼッケンつけておきましたからね」

ボタン！

丸首袖口のエンジ色の白の半袖体操シャツに「6年2組 小川」のゼッケンが付けていた。ベッドの上にたたんであるピンクの花柄パジャマに着替えようとジーンズとトレーナーを脱ぎ、ブラジャーとパンティーになった。ブラジャーを無理矢理外し小さなおっぱいを露にしパジャマのズボンを穿き上着を着ようとするとボタンが左右逆で戸惑ってしまった。布団にもぐりこんだ。なかなか寝付けず夜中トイレに起きた。トイレを探していると姉が起きていて「トイレどこ？」

「トイレ？ あなた忘れたのを？ 明かりがついてところよ」

トイレに飛び込んだ

「千鶴！ ドア閉めて！」

ボタン！

俺はパジャマのズボンと下着をおろし、便器に跨いでしゃがんだ

チーッ ジョボジョボ

小便したあとワレメちゃんを紙で拭いて思った。

「男っていいよな、小便したあと振り回してしまえばいいもん」
用を足したあとベッドにもぐった。

(これが夢であれば…)

第五話 朝

チュン チュン

夜が明け朝を迎えた。

グウウー グウウー スーソー

千鶴のベッドで爆睡している一夫は、朝まだ寒いせいか布団に巻き付いている。グウウー グウウー バタン
ベッドから転げ落ち

「痛ててて！」

一夫は目が覚め、周りをみると千鶴の部屋だった。

起き上がり、パジャマの上着を脱いで上半身裸のまま鏡台の鏡を見ると千鶴の顔と小さな胸を露にした裸の姿に

(夢じゃないのかよ…)

とがっかりした気分になった。俺は気を取り直して昨日着てたピンクのキャラプリントのトレーナーを着ようとしたら

コツツ コツツ コツツ

誰かが窓を叩く音、小さな声が聞こえる

「あたし、あたしよ 千鶴よ」

窓を開けると長袖のスポーツシャツにジーンズの半ズボン姿で黒のランドセルを背負っている千鶴がいた。

「何だよ、朝早くから」

「あんたの花柄の手提げバッグ持ってきたの」

「サンキュ！ いいから早く上がれよ」

千鶴が自分の部屋に入るなり。

「いきなり、トレーナーなんか着ちゃって、丸見えじゃないブラつけてよ！」

俺が鏡台の下着の入った引き出しからブラジャーを出すとピンクの花柄のポーチが飛び出してきた。

「何、これ？」

バシッ

いきなり千鶴が平手打ちした。

「何よ！ エッチ見ないでよあんたには関係ないでしょ！ 早くブラジャー付けてよ」

俺がブラジャーの付け方がわからず、千鶴に付けてもらうことに「あたしが付けてあげるから、ブラジャーの付け方ぐらい覚えてよ！ 胸見ちゃだめ上向いてて」

千鶴はブラの肩紐を一夫の両腕から通し背中の中のホックを留めてあげた。

ガチャン

「千鶴！ 起きたの？ …斉藤君、あなたっていう子は朝から女の子の部屋に忍び込んで、千鶴！ 男の子を部屋に入れさせるじゃありません、布団はぐちゃぐちゃでベッドを整頓するんですよ！」

ボタン！

「ああっ ああっん ううっ うわああん うわああん」

千鶴は自分のベッドに顔を埋め泣き叫んだ。

「おい、泣くなよ」

「あんたがいけないのよ、昨日あんたに会ったばかりにこんな事に…うわああん」

ポコッ！

「バカヤロウ！ いい加減にしろ！」

俺は千鶴をぶん殴った、千鶴は殴られたはずみでベッドに倒れこんだ。

「ううっ ううっ ああし死にたくなっただわ…」

「バカッ！ お前が死んだら俺、どうちまうだよ！？」

「あなたもあたしの体大事にしてよね、それよりパンツ穿き替えたの？」

「ううん」

「もう！ パンツぐらい穿き替えてよ、パンツ黄ばんでるじゃない。紙で拭いての？」

花柄パンツの股の部分がおしっこで黄ばんでいた。

千鶴が鏡台の下着入れの引き出しから替えの花柄パンツを出して一夫に渡した。

「ほらっ！」

「あっち向いてろよ！」

恥ずかしながらパンツを穿き替えた。

「穿き替えたパンツをそこに脱ぎ捨てないでね」

脱ぎ捨てたパンツを持って股の部分を嗅いだらおしっこ臭いのなんの

「いやっ！ もうパンツ嗅がないで！」

「千鶴！ 支度できたの？ 学校遅れるわ」

「ママがくるわ」

「千鶴、まずい外に出ろ、後でな」

「わかったわ」

千鶴は窓から出た。

急いでジーンズを穿いて、赤のランドセルを持ってダイニングへ

第六話 登校

ジャー ジャー

洗面所で水の音がする。

パシャ パシャ ゴシゴシ

何かを洗っている音、一夫が気になって見ると千佳姉ちゃんがセーラー服姿で洗濯している。顔を真っ赤にしながら、洗面器の水が赤く染まっているのだ。

「お姉ちゃん、何それ？」

俺はびつくりした。

「千鶴、あんたもうすぐあれがくるでしょ？ ナプキンしときなさいよ」

「あれって？」

「あんた他人事と思って！ 生理が来るんでしょ！ あたしナプキンする忘れてあんたも気を付けなさい」

「生理か…」

ダイニングに入ると

「千鶴！ 朝ごはん食べなさい、それから朝、あなたの部屋に男子なんか入れて、入れないちょうだい」

「いただきます」

「あなたの髪、ボサボサで学校行く前に髪といて！」

俺は学校行く前にブラシで長い髪をとき、赤のランドセルを背負って玄関を出た。

近くの広場に千鶴が待ってた。

「ごめんごめん、遅くなって」

「あなた、遅かったのね」

「お前のお袋がうるさくって、うるさくって」

「グズン、あああん あああん」

「お袋思い出したのか？ もうメソメソするん。斉藤一夫っていう

男の子はな、顔が悪いがちょっとやさつとで弱音吐かないヤツだ」

「グズン」

「タツチ！」

「痛てててっう！」

何者かが一夫の胸を鷲掴みにした。

「あつ！ 野口の野郎てめえ！」

野口が俺の胸を掴みやがった。緑ヶ丘小学校の校門をくぐり野口の野郎を追いかけた。

「コノヤロウ！ 野口待てえ！」

ついに野口を砂場まで追い詰めた。

「野口！ コノヤロウてめえ、おっぱい掴みやがって、スケベ野郎が」

二人とも取っ組み合いになり野次馬が取り巻いていた。

「一夫君、やめてよ！」

千鶴が叫んでいる。

野次馬をかき分け、髪の毛の短い大場恵子先生が止めに入った。

「こら！ 二人ともやめなさい！」

先生の止めに関わらずまだ取っ組み合いをやっているので二人人を引き剥がした。

「やめなさい！」

職員室

二人とも顔が傷だらけでシュンとしている。

「あたしも先生やって初めだわ、男の子と女の子が取っ組み合いの喧嘩するなんて」

「……」

「野口君、小川さんの胸なんか触って小川さんだつて怒るわよ」

「だって、オレ面白い半分さわつたら小川がいきなり怒りだし、まさか取っ組み合いになるとは」

「面白い半分でもこの年頃の女の子はデリケートなの、胸を触られたりスカート捲られたら、おとなしい女の子でも怒るのは当たり前」

でしょ」

「小川さんもそんな女の子とは思わなかったわ、五年生までおとなしい女の子と思っただのに、胸触られて腹立つのわかるけどあんなに男の子と取っ組み合いして、いいわ！　あなた何があったか後でゆっくり話し合いましょ」

「…」

「もう授業が始まるから、保健室行って傷の手当てしてきなさい」

「はい！」

「小川、ごめんな。お前がこんな強いとは思わなかったなあ！　空手道場に来たほうがいいぞ」

「おめえもあんがい強いな」

二人とも保健室で傷の手当てしながら仲直りしていた。

第七話 油虫

6年2組の教室に戻った一夫と野口はそれぞれの席についた。

一夫は顔に所々絆創膏だらけで

「いやだ！ もうあたしの顔傷だらけにして」

ガラッ！

「起立！ 礼！ 着席！」

ジャージ姿のボーイシユな大場先生が珍しくブラウスとスカート姿で教室に入ってきた。

「今日の朝、見た人は知っているとありますが、うちのクラスの野口君と小川さんが校庭で大ゲンカしました。原因は野口君が小川さんの胸を触ったという事です。小学六年生といえればあと一年すれば中学生です。一歩足を踏み入れれば大人に近づいてきた感じですよ。小学六年生でも女子は胸の大きい人もいればまだ低学年の大きさの人もいるし、男子はもう声変わりしている人もいます。まだ低学年みたいな声をしている。男子は特に女子に対し生理でからかったり、胸をさわったりスカートを捲ったり、この時期の女子はデリケートです。ちよつとの事で傷つくことがあります。気を付けてくださいね、さあ授業を始めます」

一時間目は国語の時間

国語の教科書を開き、一夫は股を開き、下敷きでジーンズの股のところをパタパタとそれを見た千鶴は
パシッ！

ものさしで一夫の太ももを叩いた。

「じゃ、斉藤君そこ読んで」

「はい、アンネはいつゲシユタボに見つかりやしないかびくびくしていました。隠れ家に身を潜め、ドイツ軍のユダヤ人護送車を通り過ぎるのを…アンネはいつもいつ戦争が終わるのか…」

「はい、そこまで斉藤君にしては上出来です。斉藤君、予習してき

ましたね、じゃ次、小川さん読んでもらいましょうね」

(どうしよう…漢字読めないし)

「どうしたの？ 早く読みなさい」

「はははい、アンネはは…いいつききよせい…千鶴いや斉藤これなんて読む」

「強制収容所よ」

「強制収容所ににいれられるか…」

「はい、そこまでね小川さん予習していませんね、それでは漢字の小テストを行います」

(やべえ、いきなりテストかよ)

「教科書、ノートしまつて」

テスト用紙が行き渡ると

「はい、始め！ 時間は10分」

(俺、全然わかんねえよ)

千鶴はスラスラと鉛筆を走らせている。

「はい、終わり！ 鉛筆置いて、後ろから集めて」

下校時間

一緒に帰る一夫と千鶴

「あたしの顔に傷つけて、あたしの体大事にしてよ」

絆創膏だらけの一夫

「お前の姉ちゃん、朝真つ赤になったパンツ洗いよつたが生理か？」

「一夫のバカッ！ 何であなたに聞くのよ？ エッチ！」

真つ赤な顔で怒りやがった。

「あたし、男なんていやよ」

「何で嫌なんだ？ 男が嫌か？」

「嫌よ！ だつてトイレやお風呂の時、股のところに変なモノが付いて蛇みたいにニヨロニヨロして気持ち悪いたらありゃしないわ、病院で切ってもらいたいわ」

「おいおい、俺の体だそ変な事考えるなよ」

それを聞いてたへんな油虫の兄ちゃんが

「ひゅーひゅ 小学生のお二人さん昼間からデートですか？」

「何だと、てめえ」

「威勢のいいお嬢ちゃん」

「お坊ちゃん、ボクと遊ばない？」

油虫が千鶴の手を引こうとすると千鶴が

「いやんやめてよ！ もうこっちこないで！ やめて！ 気持ちわるい！」

油虫を追い払おうすると油虫は面白がって千鶴をからかっている。

俺は油虫の背中を叩いた。

「コラ！ 貴様なめんなよ」

油虫が俺達を追いかけてくる

「千鶴、早くこい！」

「いやーん、追ってくるわ」

俺は油虫に捕まりそうになり、ついに油虫の急所を蹴った。

「あつ痛たたた！」

油虫は急所を押さえうずくまった。

「よし、今だ逃げる！」

ハアア ハアア ハアア

もう、油虫は追って来ないだろう。

「うわあああん うわあああん、あたし怖かったわ うつつ」

「泣くな心配するな、もう油虫は追ってこないだろ」

「うつつ うつつ 怖かったよ」

千鶴は俺の胸にうずくまって泣いていた。

第八話 身体検査

朝、野口との取っ組み合いの喧嘩で顔を絆創膏だらけで家に帰ってきた一夫

「ただいま」

「あら、千鶴なんていう顔なの？ 絆創膏だらけで」

「ちよつとな…」

「あなたはもう女の子なんだから」

俺は女の子が嫌で仕方なつた。千鶴のお袋から「女の子だから」と文句は言われるし、体は清潔にしなければならぬし、パンツは毎日穿き替えなきゃならないし、長い髪をブラッシングしパンツ一丁で過ごすわけにはいかないし、月に一度くるあれの始末も面倒くさそう。とにかく女の子というものは面倒なモノだ。俺は元の男の子に戻りたい。

翌朝、学校に着くなり大場先生が

「小川さん、斉藤君！ 校長室に来なさい」

（校長室？ 俺達悪い事したっけ？）

大場先生に連れられ校長室へ

コンコン！

「大場教諭！ 入ります！」

「入りなさい」

「失礼します！ 二人連れて来ました」

「ご苦労！ 今、緑ヶ丘警察署の刑事が来られているんだ」

「警察！？」

（けいさつ！ 俺達…）

刑事が警察手帳を見せ

「昨日、学校周辺に不審人物がうずくまってるところを職務質問し窃盗容疑で緊急逮捕しました」

もう一人の刑事が容疑者の写真を見せたら

「あつ！ 昨日の気持ち悪い油虫の兄ちゃんだわ」

「この人、知ってるの？」

「油虫、あたし達を追いかけ回してわ」

「詳しく話してくれないかな…」

警察の事情聴取も終わり、校長室を出た。

「まさか、あの油虫が下着泥棒だったとは知らなかったなあ」

「あつ！ 午後から身体検査だ」

給食後、身体検査のため体操服に着替えた。俺は女子更衣室に初めて入った。女子達が下着一丁でスッポンポンになって興奮し、丸首袖口のエンジカラーの白い半袖の女子用体操服を着てブルマに足を通し穿いたら太ももがゴムで締め付けられ気持ち悪い感じだった。

男子は教室で着替え、千鶴は一夫のランニングシャツと白の短パンを着ようとしていた。男子達の教室の中で裸でふざけあつたり、走り回っている。上半身裸の男子が千鶴の前を横切ると「きゃあ！」目を背けた。

着替えが終わわり保健室で男女別に検査を受ける。2組の番が来て先に男子が保健室へ、ランニングシャツ姿の千鶴は腕で胸を隠して背中を丸めながら男子達と一緒に出ていった。

（男なんだから胸を張ればいいのに）

女子の番が来て、俺達女子は保健室に入った。半袖シャツを脱いでブラとブルマー一丁になった。最後にバスト測定でブラを外しおっぱいが露になった。メジャーでおっぱいの下の所に廻し「68センチ」大場先生が記録している。「はい、次！」

「千鶴、バスト大きくなったじゃん！ 大人になったら巨乳じゃん！」

「いやだ！」

喋りながら保健室を出た。教室に入るやいなや千鶴がバシッ！

「一夫のバカッ！ 胸…」

俺はなんと体操服を着ないで胸を露にして廊下を歩いていたのだ。

第九話 欠席

5月中旬

下校時間、俺は久しぶりに俺の団地に行った。7棟の405号室の前
ピンポン ピンポン
シーン

誰もいない。勝手に上がりふすまを開け俺の部屋に入ると千鶴が蒲
団を敷いて寝ていたのだ。

「千鶴、お前具合悪いのか？」

「ええ、腰が重くて生理痛みたいなの！ あなた何とも無い？」

「何とも無いよ」

「よく、聞いてよ！ あなたもうすぐしたら生理がくるのよ！ い
つか下着入れの引き出しにピンクの花柄ポーチが入っているの思い
出した。そのポーチにナプキンが入ってわ、生理前に使うのよ。生
理が来てからじゃ遅いわパンツ汚しちゃうから。使い方はポーチの
中に入ってから。パンツ汚したらすぐ洗濯してちょうだい。それと
使用済みのナプキンはトイレの隅にある汚物入れに入れてよ！」

「わかったて！」

「ちよつとおしっこ！」

千鶴は重い腰を上げ布団から出てトイレへ

「あつ！ 千鶴、パジャマのズボンが後ろ前だぞ」

お尻のほうに前ボタンがあるほうに穿いている。

ジャー カサカサ ガチャ！

千鶴は布団にもぐった。

「生理痛大丈夫か？」

「ええ」

「俺、帰るから大事にしとけよ」

「あたしは大丈夫だけど、生理はあなたがなるのよ」
学校の朝のホームルーム

「上野さん！」

「はい！」

「小川さん！」

「…」

「小川千鶴さん！ 休みなの？」

千鶴が

「先生！ 小川さん具合が悪くて休むと連絡ありました」

「あっ、そう」

千鶴の家

今度は一夫が生理痛で千鶴のベッドで寝込んでいる。（千鶴と同じ、腰が重てえや）

寝返りがうちにくいのだ。横向きしたら、アニメキャラクターの枕カバーがヨダレで汚れてしまった。

ガチャン

千佳お姉さんが千鶴の部屋に入ってきた。

「千鶴！ 具合どお？」

「腰が重くて重くて」

「千鶴ったら、生理痛なんかで休んじゃって」

ベッドの布団を掛け直して

「学校では何とも無い顔するのよ、生理なんて顔してたら男子がからかうんだから」

「あたしが生理痛に効く紅茶持つてくるから」

一夫は布団をめくりベッドから体を起こした。

ズウツー ツウー

姉が持ってきたお茶を飲んでベッドに横になったいつの間にか熟睡していた。

第十話 プール

じめじめとした梅雨の真っ只中、

「千鶴！ ちよつと来なさい」

「はい」

半袖の水玉模様のワンピースを着ている俺は千鶴の母に呼ばれた。母はスクール水着を出して来て

「千鶴、ちよつと着てみて」

去年、千鶴が着ていたやつだ。俺はその場で着替えようと水玉のワンピースを脱ごうとしたら

「ちよつと千鶴！ もう自分の部屋で着替えてちよつだい」

俺はスクール水着を自分の部屋に持っていた。

去年のスクール水着は小さくて窮屈だった。胸ははみ出して股の所は「ワレメちゃんがありますよ」と学校で着られもんじゃない。

「ママ、小さいよ」

小さな水着を着たままダイニングで

「あら、本当！ 千佳いるっ？」

「はい」

「千佳ちゃん！ 小学校の時の水着ある？」

「あるわ！」

「持って来てちよつだい！ 千鶴の水着小さいのよ」

千佳の部屋から姉ちゃんの水着を持ってきて着てみた今度は丁度よかった。

「ピッタリじゃないの！ これお姉ちゃんのだけど、今度のプール開きの時、持って行って」

日曜日

千鶴の家は父と母に姉は出掛けていて一夫だけが留守番していた。

千鶴がやってきた。

「おじゃまします」

「何、遠慮しているんだ。お前ん家だろ入れよ」

一夫はタンクトップにピンクのサッカーパンツを穿いている。千鶴をダイニングに連れていった。

「食べよ！ お前のお袋が作ったヤツだ」

千鶴の母が作ったおにぎりを見て

「ママ、うつつう　グズン」

「そうか、ここに帰りたいのか」

「うつつう　うつつう」

一夫は姉ちゃんの水着を広げソファーに横になった。「これ、姉ちゃんの水着！ 去年あたしの水着小さかったのね」

「そうだ！ お前も俺の海パン穿いてみるよ。まだ大きくなってないから丁度いいと思う」

水着をマジマジと眺めながら

「ねえ、ちゃんとパンツ穿き替えてる？」

「ああ！ 穿き替えてるよ」

梅雨が明け、夏の日差しが照りつける中、緑ヶ丘小学校のプール開き俺は水着入れに姉ちゃんの水着を入れ学校に行った。俺は水着に着替えプールサイドに並んだが、千鶴は去年穿いていた海パン姿で胸を両腕で隠し背中を丸め内股でプールサイドを歩いていった。なんか可哀想だった。

第十一話 夏休み

一学期の終業式

ミン ミン ミン

暑い夏真っ盛り、セミの鳴き声が一段とうるさい中、6年2組の教室は通知表を配っている。大場先生が

「斉藤一夫君！」

「はい！」

「斉藤君、よく頑張りました。この調子で二学期頑張ろう！」

女子の番

「小川千鶴さん！」

「はい！」

「小川さん、五年生の時より悪くなつてじゃない！ まあ体育だけは、ずば抜けていいが、夏休みは一学期の復習しつかりやりなさい」

「加藤厚子さん」

「明日から夏休みです。夏休みだからといって遊び呆けないこと。一学期の復習をしたり、二学期の予習、自分がやりたい事を見つけ計画的に充実した夏休みを過ごして下さい。二学期の始業式にはみんな全員事故のない事を祈り、この教室で会いましょう！」

「起立、礼！」

「元気に会いましょう！」

「わー わー 夏休みだ！ やったー！！」

一夫と千鶴と一緒に帰りながら

「おい、千鶴！ 通知表を見せてみるよ！」

「いやよ！」

無理矢理、千鶴から通知表を取り上げ

「わっ！ 体育以外オール5じゃん！」

「じゃ、あなたの見せてよ」「何でだよ！」

「あたしの見たじゃん」

千鶴も一夫から無理矢理取り上げ

「何よこれ、いやだ体育以外1と2ばかり、あんた、ママに怒られるわ覚悟しなさいよね」

帰る足が重くなってきた。

8月の初め、千鶴の家

千鶴の部屋でつくろぐ一夫は肩紐のピンクのワンピースで大股を広げ白のパンツを見せて千鶴のベッドで昼寝している。
ガチャン

「千鶴！　ゴロゴロしないで夏休みの宿題したの？　間際になって慌ても知りませんかからね！　もうすぐあなたの誕生日ですからね」

「お　おれの誕生日？」

「あなた、忘れたの？　あなたの誕生日は8月6日でしょ」

一夫はベッドから起き上がり、ベッドに座り直した。「千鶴、誕生日の日に宏君が遊びにくるわよ」

「ひ　ひろしって誰だよ！」

「忘れたの？　栃木の田舎に遊びに行った時、一緒に遊んだ同じ年のいところよ」

「ふーん！」

千鶴の誕生日

一夫はひまわり柄の白の半袖ワンピースを着て母に長い髪をブラッシングしてもらい。宏を緑ヶ丘駅に迎え行った。

千鶴は門の所に隠れていた。千鶴の服装は白の半袖ポロシャツにジーンズの半袖を着ていた。

「行つてきます」

ひまわり柄のワンピース姿で出てきた一夫に

「一夫君、宏君が来るでしょ！　宏君には気をつけてよ」

「宏つてヤツ初めだな、どんなヤツだ」

「見た目はハンサムで頭がよくて真面目だわ、でもスケベな所があるのよ、栃木の田舎であたしが用足して所を覗く癖があるのよ」

「いやらしいヤツだな」

緑ヶ丘駅の改札

「あっ！ 千鶴ちゃん、待った！」

「うっん」

千鶴と同じくらい背が高く、顔はイケメンで有名メーカーの入ったメッシュのスポーツシャツにハーフパンツを穿いて一夫とは対照的な男の子である。

駅のコンコースを出て

「あたしの家、来ない？」

「行く行く」

「ただいま！」

「おかえり、あっ！ 宏君いつらしゃい」

「おじゃまします」

リビングに案内され

「どうぞ、お掛けになって、コーヒー持ってくるわ」

「おれ、トイレいつてくる」

トイレへ行くふりして実は千鶴の部屋に忍び込もうとしているのだ。

ギイイーツ

ドアをそつと開け

（わっ！ 女の子の匂いだ）

キョロキョロしながら、ベッドの上にあるパジャマのズボンの股の所を嗅ぎ、ついに鏡台の下着入れの引き出しを開け、千鶴のパンツを一枚失敬した。千鶴の部屋の窓から一部始終見てた千鶴は

（いやだもう、宏君ったら、あたしの下着取って！）

コーヒーとケーキを持ってきて

「宏君は？」

「トイレ」

宏がリビングに入ってきて「宏君、コーヒーとケーキ御上がりなさい」

「いただきます」

「宏君っていい男の子だわ、千鶴と同じ学校のクラスの斉藤君と大

違い！ 千鶴にまわりついて女の子みたいにヨナヨナして、ボーイフレンドにするなら宏君みたいな男の子にしなさい」
俺はムツとした。

（俺の悪口言いやがって）

「あたし、トイレ！」

玄関を通ったら

「一夫君、一夫君って」

俺を玄関から千鶴が呼んでいる

「なんだよ！」

「ちよつと来て！」

俺のワンピースの裾を掴んで玄関の外へ

「なんだよ ひっぱるなよ」

「あたしの部屋の窓から様子見てたのよ、そしたら宏君ったら、見てないと思って鏡台の引き出しからあたしのパンツ取ったのよ。もう宏ったら、気持ち悪くて」

「何、宏！ あのやろう」

俺はぶん殴ってやるかと思った。

「よし、ギャフンと言わせてやる」

「暴力はやめてよ」

「いい事がある、俺に任せろ」

俺はトイレに入った。ドアに鍵をかけずに、

ミシッ ミシッ ミシッ

誰かがトイレに近づく足音

（宏のやろうだな）

ワンピースを捲ってパンツをずり下ろし、便器にしゃがんだ。
ガチャン

「あつ！ 千鶴ちゃんのおしりだ、おしっこしてるの？」

「てめえ、このスケベ野郎が」

ワレメちゃんを晒して足に蹴りを入れた。

「ああっ！ 痛いーっ！！」

トイレで騒ぎを聞いた母と千佳姉ちゃんが来て

「何の騒ぎなの？」

「宏君？」

足を蹴っ飛ばされ

「痛い 痛い」

「宏の野郎が便所覗きやがって、おまけに俺の部屋に忍び込んでパ
ンツまで取りやがった」

「まあっ！ 本当なの？」

「おい、ズボンのポケットのもの見せるよ！」

宏がもじもじしていると

「こら、早く出せよ」

「すいませんでした…」

泣きながら観念し、ズボンから千鶴の花柄パンツと千佳のレースの
黒いショーツが出てきた。

「まあっ！ あなたという人はそんな子とは思わなかったわ！ も
う帰ってちょうだい。二度と家に来ないでちょうだい！」

「千鶴もこんな子と付き合うのよしなさい」

宏はトボトボと千鶴の家から出ていった。

「宏って男は裏表のある人間だと思わなかったなあ」

「だから、言ったでしょ気をつけなさいって」

第十二話 明美さん

夏休みももうすぐ終わりに近づき、俺は宿題の山に部屋から一步も出られない状態だった。千鶴はすでに宿題が終わりご褒美に家族旅行に出掛けてる。

千鶴が旅行から帰ってきてお土産を貰った。

「旅行、楽しかったかい？」

「うん、楽しかったわ。あなたの父と母、優しいのね」

「うちのママは？」

「優しいどころか、文句ばかり、嫌んなっちゃうよ」

二学期の始業式

クラスのみんなは日に焼けて真っ黒になっている。一夫は徹夜まで宿題を片付けたせいで目がとろんとしている。

ガラツツ

「起立！ 礼！ お早うございます！」

「おはよう！ みんな！ よかったみんな全員元気な顔見れて！」

無事事故も無く、全員二学期を迎えて嬉しいです。夏休みボケを一掃し、勉強やスポーツにいい季節になりました。頑張っていきましょうね」

「はい！」

「じゃあ！ 後ろから夏休みの宿題のプリント集めてきて下さい」
下校時間

福田達、クラス悪ガキどもがなにか企んでいる。

千鶴がキョロキョロして男子便所に入った。

「おい、一夫のヤツ、ウンの所に入ったぜ！」

「よし、一夫のヤツ、チンポコがあるかどうか確かめようぜ！」

ジャーツ カチャン バタン

千鶴は手を洗っている所に福田達、数人が取り囲んだ「おい、一夫！ おめえ立ちションもできなえのかよ？」

「何よ！ もうあっち行つてよ！」

「オカマみたいになしゃべり方してよ」

「チンポコついでのかよ？」

「もう、何よやめて！」

千鶴を個室に押し込み

「おい、入り口に見張りしろ」

「いやあ！ やめて！ きゃあ」

バタン！ カチャン

悪ガキどもが千鶴のズボンを脱がし始めた。

「きゃあー いやー！ やめてやめて」

千鶴は足をバタバタし抵抗した。

ついにブリーフをずらし、下半身を露にした。

「なんだ付いてるじゃん、一夫はやっぱり男か。面白いないな！ 行

こうぜ！」

バタン ゾロゾロ

「うっうう ううー ううー ああっあああん……」

千鶴の泣き声が男子便所にこだました。

翌日の朝のホームルームの時間

「斉藤君！」

「……」

「斉藤一夫！ 返事しなさい」

一夫の同じ団地に住む女の子が

「斉藤君、具合が悪くて休むって斉藤君のお母さんが言いました」

「あつ！ そう。後で連絡するわありがとう」

昼休み

福田が俺に

「小川、斉藤のヤツをボーイフレンドにするなよ」

「何で？」

「だってよ、あいつよへナへナしてよ、夏祭りの肝試し時、幽霊に扮した兄ちゃんに抱きついたらよ一夫のヤツ気絶してシヨンベンも

らしてがる」

「ふーん！」

「それからよ、面白い事見つけたんだよ、一夫のヤツ男のくせに立ちションできねえだせ笑ちやうよな」

「だから…」

俺は福田の言う事に腹が立ってきた。

「立ちションできねえからウンの所でするんだぜ。一夫のヤツチンポコを落としまちまったから、俺達、一夫をカイボウしたんだ。一夫のヤツが女みたいにキヤアキヤアいつて泣いて、パンツ脱いだらあるんだぜ」

俺はムカツときた

「だから…てめえ貴様あゝ」

立ち上がり、福田のズボンをずり下ろし、下半身スツポンポンにした。女子達があ

「きゃあー！」

「てめえ！ やって事がわかねえのかよ！ 教えてやるから覚えとけよ！」

福田の尻を思いつきり蹴飛ばした。

「痛てえようゝ」

「どうだ参ったか？」

「小川さん、もう止めたら」

「許してやらあ！ 二度とするなよ」

「なんや！ 男オンナ！ 一夫のチンポコ貰つとけ！」

福田は捨て台詞を吐き、逃げた。

パチパチ パチパチ

教室中の女子達から拍手が起こった。

「千鶴、強いじゃん！ 福田つていやな男よ」

「小川さんやったね！ あたし、福田からトイレ覗かれたもん、せいせいしたわ」

一夫は女子から英雄みたいに扱われた。

翌日も千鶴は欠席しているのだ。俺も気になってしょうがない。ションボリしている俺に

「あなた、本当は斉藤一夫君でしょ」

女の子が声をかけてきた。髪がショートカットでボーイッシュな感じ。でスポーツシャツにハーフパンツを穿いている。

「ううん、あたし小川千鶴よ」

「うそおっしゃい！ あなた本当は斉藤一夫君。あたしの名前は川上明美よ。新しいクラスになってから二人が気になって…」

「誰も信じてくれない。俺は小川千鶴で通している。だから、俺は小川千鶴だ」

「でも、戻りたいでしょ！ いいわ、あなた日曜日にあたしの家に来ない？ ゆっくり話し合いましょ」

「今度の日曜日に川上明美の家に」

第十三話 明美さんの家

日曜日の朝

千鶴の部屋では、一夫が整理タンスから丸襟長袖の白いよそ行きのブラウスと紺色のプリーツの吊りスカートに着替えていた。
ガチャン

千佳お姉ちゃんが俺の部屋に入るなり

「千鶴！ よそ行きの洋服着て、男の子とデート？」

「ううん、同じクラスの女の子の家にお呼ばれしているの」

俺は女の子言葉に慣れてきたせいか抵抗なくすらすら喋れるようになったが、興奮すると男言葉が出る事もあるのだ。

「行つてきます！」

千鶴の家を出て、歩いて20分ほどで明美の家に着いた。明美の家は門構えが大きくて庭が広く芝の手入れが行き届いている。いかにもお金持ち家である。

玄関のインターホンを押すと

ピンポン ピンポン

「はい！ どなた？」

「私、緑ヶ丘小学校の6年2組の小川千鶴といいます」

「小川さんね、どうぞ御上がり下さい」

ガラガラ！

玄関の引き戸を開けると土間は広くて鎧兜が飾っている。奥から川上明美が和服姿で出てきた。学校の時のラフな服装とはえらい違いだ。

「どうぞ、御上がりになって！」

黒のハイヒールを脱いで、玄関を上がり、広い廊下を歩き、畳10帖ほどの居間に案内された。

襖を開けると広い畳の居間に大きな長方形のテーブルが真ん中に据えてあった。「どうぞ、お座りになって」

「はああい」

俺は座布団の上に正座して座った。

「お茶、持ってくるから」

お盆の上に吸臼と湯呑を載せて明美が持ってきた。

お茶の葉を吸臼に入れお湯を注ぎ、吸臼から湯呑にお茶を入れた。

「どうぞ、お召し上げれ」

湯呑を一夫の座ってる前に出した。

ズウウツ

（うまいっ！ 今まで飲んだことねえお茶だ！ 俺ん家や千鶴ん家のお茶とはえれい違いだ）

「斉藤一夫君でしょ？」

「いいえ、あたしは小川千鶴です」

「斉藤君、無理しなくていいのわ。でもあなた達二人見ていると楽しくって」

「どうして？ あたしいや俺は千鶴と何かの拍子で入れ替わってしまった。千鶴も同じだ。慣れない女の子の生活で辛いんだ。千鶴はもっと俺より辛いかも…」

「あたしもわかる、だってあたしの家、父が社長だから常にお行儀よくしないとだから、学校にいる時ぐらいは男の子みたいな服装するの」

「あなた、元の斉藤一夫に戻りたいでしょ」

「いや、あたしはもう小川千鶴だわ！ もう女の子の事に慣れたから」

「本当の事、言って！ 男の子に戻りたいのでしょ！」

明美は立ち上がり、一夫の後ろから胸に手を廻し二つのおっぱいを掴んだ。

「痛ててえっ！ 何するんだよ」

「やっぱり、男の子だ」

ガラツツ

「明美お姉ちゃん、これ直して」

明美の弟が壊れたミニ四駆を持ってきた。

「アキヒロ！ 今、お姉ちゃん達は大事なお話しているの後にしなさい！」

「嫌だ 嫌だ！」

「もう、わがまま言わないの」

「これ、俺が直してやる」

外れたタイヤをはめてプラスチックの歯車を噛ませてスイッチを入れると

ウイーン〜 キュルルル

タイヤが回った。

「わーい！ わーい！ やった直った！ お姉ちゃんありがと！」

喜びながら居間を出た。

「斉藤君って、やっぱり男の子ね」

一夫は男の子に戻りたいという気がした。

ジーン ジーン

ドタツ！ ゲキツ！

「痛あつ！ 痛てててえ！」

一夫は慣れない正座で足が痺れ、立ち上がろうとしたら倒れ足首を捻挫した。

「小川さん、大丈夫！」

「大丈夫！」

「足首が赤くなってる、捻挫だわ」

「手当てするから、あたしの部屋に行きましょう」

びっこひきながら明美の部屋へ

湿布して包帯巻いて

「しばらく、あたしの部屋で休んでいって、蒲団敷こうか？」

明美の部屋は和室なので、押し入れから蒲団を出して敷いた。

「しばらく間は安静にしとくいいわ」

第十四話 あいつが自殺

一夫は捻挫し、一晩中痛みが疼き眠れなくなった。

朝、一夫は午前中に整形外科を受診した。

レントゲン写真を見て

「幸い骨折はないですね」

処置室で痛み止めの注射と湿布の貼り替えをした。足首を見たら見事に青じんでいた。いかにも痛そうだ。

鎮痛剤と湿布を貰って、一日中千鶴のベッドで寝ていた。

翌朝、痛みが退いて学校へ赤のランドセルを背負って体操服袋を持つて。

「行つてきます！」

「千鶴、大丈夫！ 無理しないで体育休みなさい！」

体操服袋をお袋に預けた。少しびっこひきながら登校した。

六年二組の教室

「おはよう！」

「千鶴！ 痛そう大丈夫！」

「大丈夫よ」

明美が

「千鶴さん、一昨日来てくれてありがとう。捻挫大丈夫？」

「幸い骨折れてなくて、昨日あたしのベッドで寝ていたわ」

「そう！」

「ところであなたの千鶴さん二週間も休んでるわ、行ってみてわ」

そう言えば千鶴のやつ二週間も休んでる。

下校時間

俺は千鶴の所へ行く事に

俺の団地の前にびっこひきながら四階の405号室

ガチャン

鉄製のドアを開けると誰もいなかった。

俺の部屋に千鶴がいる。

「あつ！ 一夫君会いたかった！ うつつ」

「二週間も学校来てないから心配したぞ！ 良かった元気にして」
千鶴が俺の足首を見て

「あつ、一夫君、あたしの足首包帯までどうしたの？」

「捻挫したんだ」

「大丈夫！ あたしの体なんだから」

「わかった」

「あのね、あたし家族、正月前に九州に引っ越すの」

「えっ！ まじかよ」

（もし、戻れなかったら…）

俺は覚悟を決めなきゃならない、千鶴もだ。

「あなたは小川千鶴になるのね。将来、何になるの？ 立派なお嫁さんね」

「お前は、斉藤一夫という男の子だ」

「ええ、立っておしこの練習しないとね」

「俺は女の子に慣れた。体は清潔にしているし、パンツも毎日穿き替えてるし、月に一度のあれも」

「ねえ、一夫君」

「何？」

「最後にあたしのカラダ見せて？」

俺のブレザーのボタンを外し、チエックのブラウスのスナップを丁寧に外して、ブラをした裸が露になった。ブラのフロントホックを外すと小さなおっぱいに千鶴が顔を埋めて

「あたしの体だわ、カラダ！ さようならあたしのおっぱい！ あたしのおっぱい！ うつつ」

俺は服を着直した。

「あたしの家に帰りたいの、ママやお姉ちゃんに会いたいわ、でなきゃあたし、死ぬわ！」

「おいおい、待てよ！ お前が死んだら俺、どうするんだよ？」

「うつつ　　うわあああん！」

千鶴は外へ飛び出した。

「おい、待てよ！」

俺も千鶴の後を追った。

最終話 再び神社にて

「おい、待てよ千鶴！」

バタバタ バタバタ

団地の階段を走って降りる千鶴

後から捻挫した足を引きずりながら追う一夫

団地の敷地内を歩く二人

「あたし、あたしの家に帰りたい。ママや千佳お姉ちゃんに会いたい」

「ちょっと、待てよ千鶴、その格好で会ったらどうなる」

「グズン、ううっ ううっ」

「泣くなよ、どうやって戻れるか考えてからよ」

ついに二人が入れ替わった神社に来てしまった。

タッタッタッタッタ

二人は石段を上り境内へ

ゴロゴロ ゲキユルル

一夫は腹をこわしゴロゴロと鳴りだした。

「ちょっと、腹が痛くてな、そこで待つてろよ！ 死ぬこと考えるな」

一夫は神社の草むらにお腹を押さえながら走った。一夫はスカートを捲り、パンツを下ろし草むらにしゃがんだ。

(うっうっうっ)

ブリブリブリシャー ブリブリブリ

千鶴は草むらにしゃがんで苦しんでいる一夫を見て

「帰りたい、バイバイ一夫君！ あたし…」

千鶴は石段へ

一夫はやつと葉っぱで尻を拭きパンツを上げ、スカートを下ろし、石段に飛び込もうとする千鶴に

「死ぬな！ 千鶴！」

叫んで走り、捻挫した足がもつれて千鶴に抱き付いた瞬間、二人とも転がり落ちた。

二人とも下で気を失った。

一夫が気が付き

「千鶴、千鶴！ 死ぬな！」

声が低い気がする。何か胸がスースーする。

「うわあああん うわあああん 一夫君」

（俺なんで男の子の服着てるんだ？ 着替えなくちゃ）

一夫は長袖のポロシャツにジーンズの半ズボンを穿いている。

千鶴はブレザーにチエツクのブラウス赤いスカート

「ねえねえ！ あたしぶって！ぶってぶって！」

よく見ると元の千鶴に戻っているのだ。俺も男の服を。二人は確かめるべく背中合わせになり、俺は胸を触り

「無い！」

ジーンズの半ズボンに手をつ込み、男の大事なモノを確認した。

「ある！ あったあった！ 千鶴は？」

千鶴はまず胸を触り

「あるわ ある！」

パンツの中に手を入れると

「ない！ なくっているわ！」

「あたし達、元に戻ったのね」

「うん！」

二人抱きしめぐるぐる回った。

「千鶴！ お前の事大好き！ 幼なじみでよかった」

「あたしも一夫君の事、大好き！」

一夫と千鶴は目をつむり唇と唇を合わせた。

「ちよつと、待て！ 俺シヨンベン、立ちシヨンするからな」

「見せて 見せて やって見せて」

「よし！」

背中を向け、ジーンズのチャックを開けホースを出し

ジャーツ！ ジョボジョボ…

振り回し滴を切ってジーンズの中に収めた。

「あたしも何か、おしっこがしたくなっちゃった」
千鶴を顔赤らめて

「一夫君、紙ある？」

「ある ある してこい」

ポケットティッシュを千鶴に渡し、神社の公衆トイレの赤いスカート
のマークの入口に長い髪の千鶴が消えて行った。しばらくして、
嬉しそうな千鶴が女子トイレから出てきた。

「あたし、あたしん家に帰る」

「うん、俺も」

千鶴は石段を走って昇って行った。

完

最終話 再び神社にて（後書き）

どうでしたか？ この物語は、男と女が入れ替わる。実際はありえない話なのに「もしも」がある。

もしも、俺が女の子であたしが男の子だったら…

男の子が女の子になった場合を考えるとまずオチンチンがない。従って立つておしっこが出来ない。しゃがんでするわけでパンツの上げ下げして大便する格好である。おまけにホースがないから振って滴を切ることが出来ない。紙で尿道口を拭かなければならない。紙で拭かなかつたり、拭き方が悪かったらたちまち膀胱炎や尿道炎になつてしまう。おっぱいが有ることブラジャーを着けなければならぬ事や月に一度の生理がある。男子諸君に縁のないナプキンやタンポンなどの生理用品の使い方、パンツを経血で汚した処理など、男にない女の子の面倒臭さ、反対に女の子が男の子になつた場合はオチンチンが突然生えてきた感じで気持ち悪いいやらしさである。恥ずかしさに立ちションが出来ない。胸を曝け出して上半身裸になる事が出来ない。学校の水泳の海パンや学校によつて体操服のランニングシャツなど胸を露にする服装は恥ずかしく胸を隠さなければならぬ。

一学期の始業式の時、一夫と千鶴が出会い、ひよんな事から入れ替わり、違った異性の生活を経験する事でお互い理解しあえるようになった。元に戻ったときはお互いが好きになつていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3440n/>

幼なじみ

2010年10月15日02時02分発行